被災地での宿泊研修 – 南三陸町での交流活動等

「東日本大震災からの記憶～千年に一度の災害は、千年に一度の学びの場 ～」

講師／南三陸ホテル観洋　女将　阿部 憲子氏

合同防災キャンプ初日の夜には、参加者が宿泊する南三陸ホテル観洋の阿部 憲子女将より、お話を伺いました。

東日本大震災時、津波で町の中心部の志津川地区などは甚大な被害が発生しましたが、ホテル観洋は大きな被害を免れ、宿泊客のほか避難してきた住民を受け入れる避難所となりました。ライフラインや道路の寸断によりホテルが孤立する中、女将は、不安になる従業員たちを集めて、「心を強く持って。」と励ますとともに、「お客様や住民を優先するため、従業員は覚悟してほしい。」と、リーダーとしてホテルの方向性を示すことで、先の見えない危機的な状況を乗り越えたということでした。

ホテル観洋は、その後、仮設住宅に移るまでの二次避難所、震災復旧に携わる人々の拠点となるほか、避難生活を送る子供たちの学習の場など新しいコミュニティの場としても、復興・再生の中心的な役割を果たされてきました。女将からは、「千年に一度の災害は、千年に一度の学びの場」であるとし、この災害から学びそして伝えていくことの大切さをお話しいただくとともに、災害から学んだことの一つとして、「人は一人では生きてはいけません。人とのつながり、仲間が大事です。みなさんもこの研修で良い仲間を作ってください。」と、参加者にメッセージを送っていただきました。

※　阿部 憲子氏からのお話は 、防災士養成講座のカリキュラム（防災士養成講座 [7]「避難所運営と仮設住宅の暮らし」）となっています

宿泊研修一日目・二日目の振り返り

「合同防災キャンプの二日間のまとめ　考えたこと・得たことは？ ～発生が懸念される首都直下地震に備えて～」

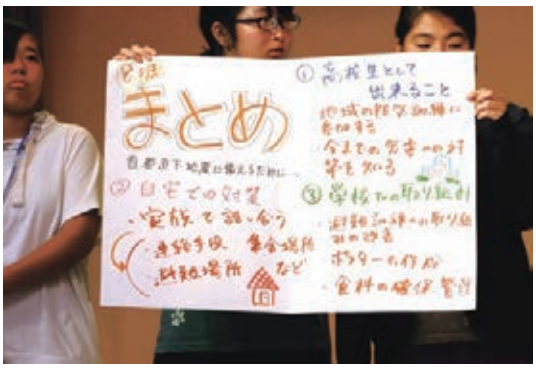
講師／環境・防災コンサルタント、元横浜市消防局 消防監、社会貢献学会 理事　秦 好子氏

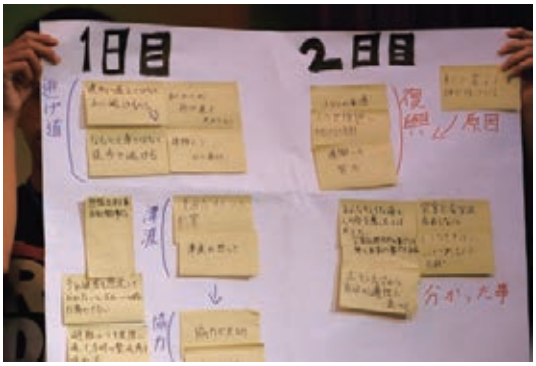
合同防災キャンプ二日目、防災士養成講座「災害とボランティア活動」の終了後、秦氏にファシリテーターをお願いし、二日間の振り返り学習を行いました。

参加生徒は、班ごとに、一日目・二日目で学んだこと及び学んだことを踏まえ首都直下地震について備えること（高校生としてできること、自宅での取組、学校での取組）を模造紙に書き、発表を行いました。

「志津川高校の生徒たちが、協力して高齢者を運び避難させたという話から、共助の大切さを学んだ。」、「金比羅丸の髙橋さんのお話から、自分の地域を知ることの防災における重要性に気付かせてもらった。」、「学校の避難訓練では『走らないで』と言っているが、被災地の方々の津波から走って逃げたという話を聞き、門脇小学校の避難経路を実際に走ったことで、実際の災害を想定して行動することが大事だと思った。」など、それぞれの場所で学んだことを全体で共有しました 。

また、首都直下地震に備えて 、「地域の避難訓練に参加する。」、「得意分野を活かしボランティア活動に参加する。」、「東日本大震災で被災した高校生との交流活動を継続して実施する。」など、二日間の経験を踏まえた具体的な内容が発表されました。





「東日本大震災　消防活動の記録～震災から得た教訓～」

講師／気仙沼・本吉地域広域行政事務組合 南三陸消防署 当直司令兼警防第二係長　及川 孝氏

合同防災キャンプ三日目の朝は、南三陸消防署の及川司令より、日頃から防災訓練等の指導を行い、災害時には最前線で活動する消防機関の視点から、お話ししていただきました。

及川司令からは、最初に「地震が起きたらまず自分の身の安全を守ること、津波が来たらできるだけ早く、高く、遠くへ逃げ、決して戻らないということが鉄則」とのお話がありました。

そして、過去に宮城県を襲った津波、それを踏まえた震災前の南三陸町の取組、東日本大震災における被害と消防の活動について、順番に説明をしていただきました。

震災時に、これまでの取組が活かされた点として、「沿岸部の住民は、実際に逃げる避難訓練で避難行動を培っていたため、犠牲者がほとんど出なかったこと。」、「中学生全員が防災訓練に参加するなど中高生の防災教育の充実と意識の高揚を図っていたため、彼らが人命救助や応急処置等で活躍したこと。」などが挙げられました（戸倉中学校の生徒が、津波に流された南三陸消防署員などに対し応急処置を行い助けた事案を例に説明いただきました。）。

一方で、震災を経験しての反省点として 、震災前の想定に捉われ、ここまでは津波が来ないだろうという「正常性バイアス」が働いてしまったことを挙げられました。

最後に、及川司令から、震災を経験して伝えたいこととして、「命を大切にしてください。そして、自分や周りの人を大切に思い、様々な困難を乗り越えて生きてください。」という言葉があり、参加者は、災害を乗り越える上で最も大事なことを教えていただきました。

※　及川 孝氏からのお話は、防災士養成講座のカリキュラム（防災士養成講座 [9]「行政の災害対応」）となっています

被災地での宿泊研修 – 南三陸町での交流活動等

語り部バス及び南三陸町職員による講話

【語り部バス行程】

南三陸町立戸倉公民館（旧南三陸町立戸倉中学校）→旧南三陸町立戸倉小学校跡地→
南三陸町旧防災対策庁舎→旧高野会館→南三陸町ベイサイドアリーナ→南三陸さんさん商店街

【講話内容】

「東日本大震災での体験談　～生き延びるために～」
講師／南三陸町教育委員会 志津川公民館・入谷公民館 館長　佐々木 仁一氏
「南三陸町の防災について　～東日本大震災をふまえた防災対策～」
講師／南三陸町危機管理課 課長　村田 保幸氏・主事　西條 和弘氏

合同防災キャンプ三日目、ホテル観洋にお別れを告げて語り部バスに乗り込んだ参加者は、南三陸ホテル観洋の伊藤 文夫氏や伊藤 俊氏など語り部の方からお話をしていただきながら、南三陸町の戸倉（とむら）地区、志津川地区を回りました。

バスは、まず、戸倉地区に向かい標高約１５ｍの高台に位置する戸倉公民館を訪問。語り部の方より、震災当時、戸倉中学校であったこの建物の１階天井に達する高さまで津波が押し寄せ、校庭に避難してきた多くの方が犠牲になったこと、外壁にかかる時計は、その記憶を残したように、東日本大震災直後の時間で止まっていることなどをバス内で説明していただきました。

公民館の中に入り、海が見渡せる２階のホールでは、志津川公民館・入谷公民館の佐々木館長より、九死に一生を得た体験談、体験から得た教訓、そして災害時に生き延びるための考え・方法についてお話をいただきました。

津波警報が出てすぐ、役場職員として水門等の閉鎖を確認した佐々木館長は、車で避難所に向かう途中、この建物の裏側辺りで津波にのみ込まれました。必死で車のリアガラスを素手で割って脱出した佐々木館長が、電線をぐるぐるに腕に巻き付けて津波に流されないようにしている写真を見せていただき、決してテレビ等では報道され

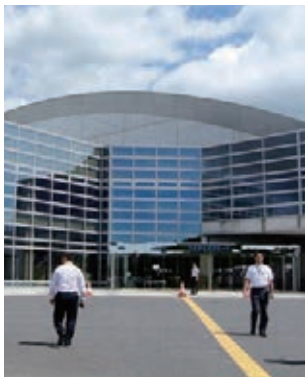
ない生死の境を写した写真に、参加者は言葉を失いました。

佐々木館長からは、「生き延びるために、自然災害のレベルを自分勝手に決めないこと。」、「災害に巻き込まれ、苦しい場面でも、決して諦めないこと。」、「日頃から油断しないこと。」を教えていただきました。

戸倉公民館を離れ、語り部の方から 旧戸倉小学校の避難経路等の説明をしていただきながらバスは志津川地区へ。震災遺構となっている南三陸町旧防災対策庁舎と旧高野会館では、それぞれの建物において、極限状態で、どのようなことがあったのかをお話し頂きました。また、南三陸町旧防災対策庁舎においては、代表生徒による献花と、参加者全員での黙とうを行いました。

バスは最終目的地、南三陸町総合体育館ベイサイドアリーナに到着、そこでは、南三陸町の村田危機管理課長と西條氏より、東日本大震災を踏まえた同町の防災対策についてお話しいただきました。震災を経て、「防災から減災へ」、「助けることより助かることを優先」と、町の防災対策の主眼がシフトしたと言います。村田課長は、「この先、関東から東南海にかけて大きな地震の発生が予想されていますが、大きな災害を経験した人は一握りしかいません。その経験から学び、いざという時に周りの人たちの道標となるのが防災士です。」と、防災士の資格をこれから取得する参加者にエールを送ってくださいました。

※　語り部バス及び南三陸町職員からの講話は、防災士養成講座のカリキュラム（防災士養成講座 [10]「地域の復旧と復興」）となっています。



被災地での宿泊研修　南三陸町での交流活動の感想

●南三陸ホテル観洋 女将の講話

南三陸ホテル観洋の女将の話に、とても感動した。特に印象に残っているのは、「私たちはこの震災で多くのものを失いました。しかし多くのものを得ることもできました。」という言葉だ。	生徒
南三陸ホテル観洋の女将の、地震直後から、数か月に渡る被災生活、その後の復興への取組状況の講話には、とても引き付けられた。特に、被災直後の決断力やホテル従業員を統率する力は、災害がある・ないにかかわらず、リーダーとして必要な力であると感じた。そのようなリーダーの育成は、我々教職員は常に意識しなければならないこと。知識は必要ではあるが、防災教育を通して一番重要なことは、リーダーシップのある人材の育成だと感じた。私たち教職員や防災士も、リーダーシップを発揮できるだけの見識や研修、冷静な判断力を身に付けるべく、日々研鑽を重ねる必要があると感じた。	教員

●南三陸消防署の講話

自然について知っているつもり、防災ができているつもりのままで放置してはいけないと思った。事実、宮城では宮城県沖地震以降、浸水域を予想したマップを作り、早朝に避難訓練を行うなど、万全にも見える防災活動をしていた。しかし、東北地方太平洋沖地震によって起きた津波の規模は、直前の津波警報をも大きく上回るものとなり、多くの犠牲者が出てしまった。普段から、災害に備えていても、これで完璧だと思わずに、常に想定外のことは起こり得るということを忘れずにいることが大切だと思った。	生徒
南三陸町消防署職員の方の話の中で、「町内会や消防団も失われた。」とおっしゃっていて、そういうコミュニティがあるから大丈夫だろうという根拠のない安心をしないように周りに呼び掛けていくのも、お話を聞かせていただいた私の役割であると感じた。「みんなが備えていて、みんなが逃げて当たり前」という状況を作ることが防災なのではないかと学んだ。	生徒
震災発生時、避難だけでなく、及川さんのように自分の役割もあった人たちは、更に大変だったのだろうなと思った。及川さんのお話から、高台へ逃げること、できるだけ早く、できるだけ高く、できるだけ遠くへ、そして戻らないことがとても大切だと学んだ。また、通常の環境にちょっとでも異変を感じたら、すぐに行動できるかどうかが大切だとも感じた。	生徒

●語り部バス

語り部バス・伊藤さんの、「景色は変わっても事実は変わらない。」という言葉がすごく印象的だった。何かあった時にその場所に行って、私が大切な人を助けることはできない。だからこそ変わっていく景色の中に、私が感じた３月 11 日のことを、今回伺ったお話を伝えながら大切な人に伝えて、災害時に自分の命をも守ってもらえるようにして欲しい。	生徒
南三陸町の危機管理課の方のお話で、「復興の原点は人の力」という言葉が印象に残った。人がどう対応するかというソフト面を強化することで被害を減らせることが分かった。ベイサイドアリーナはとても立派な施設だったが、震災時は避難所になったそうで、お話をよりリアルに感じることができた。	生徒
南三陸町職員の方の「九死に一生」の経験談は、にわかに信じ難いほどの奇跡的な経験で、生徒たちも非常に熱心に耳を傾けているのが伝わってきた。死ぬという瞬間への想像、実感から、諦めないで生きてみせるという意思への転換というお話だったが、自分ならどうだろうと考えずにはいられない。語りの持つ力を強く感じ、心をうたれた。	教員
戸倉公民館でのお話では、「命を大切に」という言葉が印象的であった。自動車を運転されていて、途中諦めかけたこと、車外に出て波にのまれる中、電線を体に巻き付けて流されるのを防いだ話や写真等に、衝撃を受けた。とっさの判断と諦めない強い気持ちを持つことが重要であると認識できた。	教員
語り部バスの中でガイドの方から聞いた話は、生き残ったものだからこそ伝えられる話であった。当時の様子や状況、混乱し、様々な思いがあふれ出していた。記憶は薄れてしまうし、忘れさられてしまうものだから、そのように伝えていくことが大切なのだと思う。人々は震災が起きるたびに後世・後代に伝えているはずだが、それらも忘却されてしまい、何もない状態の時に大きな災害が起こる。私たちができることは、話を聞き、つなぎ、そして忘れないことである。	教員